

『Innominata』, エロスと聖の dialectique

—形・意味の分析⁽¹⁾—

谷 口 正 子

〈好んで読み返すことのできる稀な作品の一つであるこの詩を、いささかの優しさをこめて考えることを許して欲しい〉。Pierre Jean Jouve (1887-1976) は、自伝『鏡に』の中で、連詩『Innominata』についての愛着をこのように語っている。

占領下のフランスが最も暗黒の時期に入ろうとする1941年の終、亡命のため国境を越えた直後、〈ジュネーヴのホテルの一室でこの詩は書かれた〉。

詩の主題についても彼ははっきりと記している——〈Nada (無) のテーマの最も確実な表現である〉と。Nada の萌芽は、無意識の世界に基づいて書かれた最初の詩集『血の汗』(*Sueur de Sang*, 1933) の〈黒いイメージ〉の中にすでに見られる。精神分析医であり、のちに妻となる Blanche Reverchon との出会いがそのきっかけであった。やがて、『天の物質』(*Matière céleste*, 1937) で積極的にあらわれ、さらに数年の〈瞑想と残酷な事件〉に養われたこのテーマは、レジスタンス中の42年に Fribourg で初めて出版された詩集『パリの聖母』(*La Vierge de Paris*) の中で熟した。詩人の長年の内的な探索と、政治上の外的な状況がもたらした苦悩とが、このテーマの中で合体する。『Innominata』は、この詩集中の作品である。

〈Nada もしくは「不在」(Absence) のテーマ〉とは何だろうか? その基底には、読書によって培われたスペインの神秘家たち、特に十字架の聖ヨハネ (Saint Jean de la Croix, 1542-1591) の〈暗夜〉(nuit obscure) への共感があった。〈暗夜〉とは、Nada と Todo (全) が、矛盾しながら結ばれ合う霊的な浄めの場である。〈夜は異なった二つの道をもつ。一つは不吉な暗黒の道であり、もう一つはそれと対立するものへと姿が変わる、光の道である〉。詩における先輩たち——ネルヴァル、ボードレール、ランボー、マラルメらをおしみながらも離れた Jouve は、16世紀のカトリック神秘家に〈敬意をもって〉近づいた。ほどなく〈夜〉と Nada のテーマは、この現代詩人によって一層複雑な意味をになうことになる。それは、〈エロスが、空虚と、苦悩する力の爆撃地帯を横切りながら、「み言葉」(Verbe) へと、神の愛へと変る〉場としての〈「詩」のアイデア〉となる。

だが、この辺で、このテーマについての解説を『鏡に』における詩人自身にまかせきり⁽²⁾、この試論の目的であるテキストそのものの分析に移ろう。この分析は、形と意味の両方に同時に関

わりながら行われる。なぜなら、ことばとしての詩的メッセージの研究は、〈リズム上の、音韻上の事実が、意味のすべてに結びつく時にのみ〉成立するように思われるからである⁽³⁾。

1

最初の二つの詩は、いわば序論とも言えるであろう。『Innominata』全篇がここに示唆される。

1も2も、2人称を使つての呼びかけだが、対象が違っている。1では神に、2では女性に対してである。

冒頭の2行がまず対立する。

Toi qui dors, fortifie le sang des *amants*⁽⁴⁾

Toi qui veilles, libère les *amants* du sang.

眠っている神よ、恋人たちの血を強めてください。

目覚めている神よ、恋人たちを血から解き放つてください

1行目があることによって2行目がある。恋人たちの血は極限まで〈強められ〉てこそ初めて〈解き放たれる〉のだ。dors と veilles, fortifie と libère の対立のほかに、同じく [ā] を含む sang と amants の場所の交替もこの効果を強める。

Un homme est plus divin que la *guerre* étrangère

Si par *guerre* il se fait destruction nue

S'il *meurt* à ses chemins de terre et s'il n'est plus.

divin (神聖な) と destruction (破壊) の意味上の対立と二語間に共通な [d], plus divin (より神聖な) と n'est plus (もう存在しない) における plus の共通性にも注目したい。

Mon Dieu! que tu seras un infini asile

Au coeur *sans* visions, à la chair *sans* maison,

A la mort corporelle et *sans* idylle.

神よ! 無限の隠れ家となつてください

ヴィジョンのない心の、家のない肉体の

からだの死、牧歌をもたない死の。

Jouve にとって、「死」は救いの第一条件である。生はんかの死ではない。なにもかも捨て切った死。〈存在しなくなつて〉初めて、神において存在しうるのだ。2の [si], 3の [sā] の繰り返しだが、神に呼びかける詩人の執拗な囁きとなる一方で、音と意味の連鎖で結ばれた *guerre* (闘

い) —*guerre—meurt* (死ぬ) —*terre* (地) の語群が、人間の悲惨さを喚起する。

2

先に述べたように、同じ *toi* という語を用いても、2の *toi* は女性である。〈神〉と〈女〉が *toi* によって合体し、Jouve 的なテーマを形づくる。

.....

侮辱によっておまえからひき離されたわたしが
 世界を数えあげるおまえの腹のひだを錫の鏡でいつも見つめるために
 おまえの数知れぬ不幸によって、わたしが神に投げ出されるために。

ただ一人の女が問題なのではない。世界中の女たちの涙、〈不幸〉が詩人を神に近づかせる。女と神の合体の深い意味が、ここで明確化される。『血の汗』の序文の確認である⁶⁾。女との交わりによってひき起される哀しみは、詩人にとって救いのための必須条件なのである。

3

3から6までは〈第一の点〉(PREMIER POINT)と名づけられている。〈点〉の順序は、十字架の聖ヨハネの神秘神学書の考え方の各段階に従っており⁶⁾、〈第一の点〉は、〈感覚の夜〉(*nuit des sens*)に呼応する。官能的な情景が生々しく描き出され、まずそれを〈忘れねばならない〉と詩人は言う。3は詩全体の中でも特に美しい箇所なので、長いが全文を掲げる。

Oublier

Abandonner au fleuve aux temps glissants et *noirs*
 Ce qui fit que la chair était *nue* dans le temps
 Quitter à chaque jour l'édifice brillant
 Les salles illustrées de la mémoire

Perdre son coeur son eau et son temple
 La chair des *piliers* l'eau des lèvres
 Et la rondeur du sein de céleste matière
 La beauté du *palais* formée avec les membres.

Perdre volontiers

Les heures noires du *péril* et du soleil
 Aussi bien que la nuit corporelle sacrée
 De la mère avant que l'homme fût vertical

Oublier le voyage en toute forêt vive
Le génie du regret qui dicta tous les livres.

忘れるのだ

河に うつろう暗黒の時にゆだねるのだ
時間のなかで肉体を赤裸とさせるものを
かがやかしい建物を日ごと離れるのだ
記憶でいろどられた部屋を

失うのだ その心 その水 その聖堂を
列柱の肉体を 唇の水を
天がつくり出した乳房のまるさを
手足で形どられた宮殿の美しさを

よろこびながら失うのだ
危険と太陽の暗黒の時間を
人間が垂直になる前の 母の
聖なる肉体の夜を

忘れさるのだ 生きた森の旅を
あらゆる本を書きとった悔恨の天稟を

この詩で初めて〈夜〉(nuit) という語が出ているが、〈夜〉は Jouve にとって、ボードレー、アポリネールなどにとってと同様に、キー・ワードである。ギリシャ以来の秘教的伝教(ésotérisme)や、キリスト教的神祕主義の一つのテーマをもあらわすこの語は、Jouve の場合、「聖」と「エロス」の合一点としての深い意味をになう。

ただの一語、〈忘れるのだ〉だけしかない第一行がまず読者の心を打つ。次に、子音 [n] の効果に注目させられる。〈暗夜〉(nuit obscure) の中で〈赤裸〉となること、これは十字架の聖ヨハネの、そして Jouve の主要テーマだが、音の一致もまたそれに荷担する：*noirs* (暗黒の)—*nue* (赤裸の)—*nuit* (夜)。〈夜〉はまた、『パリの聖母』中の他の詩、とりわけ『聖人の夜』(Nuit des Saints) を想起させる⁷⁾。2節と3節の、子音 [p] の効果も忘れてはならないだろう：*perdre* (失う)—*piliers* (列柱)—*palais* (宮殿)—*péril* (危険)—*corporelle* (肉体の)。これから浮かび上るのは、女性と喪失のテーマである。

以上は音が意味の関連を助けている例だが、〈天がつくり出した乳房のまるみ〉とか、〈聖なる肉体の夜〉のように、対立語を隣接させることによって Jouve のテーマに与っている表現も見

落せない。

なお、最後の二詩句には、それまでの版を潰して過去を棄てた詩人自身の1924年の体験が歌いこまれている。

4

4は3の延長だが、1, 2行目は一見、3と全く対立的なことを言っている。

忘れること それは汚辱の場所でふと愛した
ふとりじしの娘を讃えること
ただひとつの永遠を思い出すこと
ひろげられた腕にもかかわらず
.....

「エロス」は一層人格化され、一人で歩き出す。Jouveにとって〈忘れること〉は、女との愛の行為が前提となる。愛の苦しみなしに〈忘れる〉ことはありえない。しかし〈忘れること〉は、また、〈ただひとつの永遠を思い出すこと〉(se souvenir/...de la très seule éternité)であり、〈再び得るために失うこと〉(perdre pour regagner, 第4行)なのだ。失うのは女とは限らない。〈記憶を／知恵の樹を、自由の樹を〉(la mémoire/L'arbre de science et l'arbre de liberté, 5, 6行)を棄てきることだ。〈平和を闘いでうめかせる〉ことだ。Jouveにとって最終的に問題なのは〈愛〉(charité)でしかない。

.....

Laisser la paix gémir avec la *guerre*
C'est en ce lieu n'avoir plus que la *gloire*

La charité.

charité がこの節の最終行に、一語だけの詩句として孤立して置かれていることも効果的である。

音の面について言えば、charitéの〔ʃ〕は、4では出て来ないが、chair〔ʃe:r〕(肉)を思い出させ、この詩中の〈ふとりじしの娘〉(fille.../Grasse)との関連を感じさせる(charité=fillegrasse)。charitéは、まだ、『聖人の夜』に見られるようなCharité(聖なる愛)ではない。7行目と8行目のそれぞれの末尾 guerre(闘い)と gloire(栄光)が fausse rime となっていること、〔g〕が共通であることにも注目したい。〈闘い〉と〈栄光〉は、音によって結合する。第一節の〔s〕も、恐らく同じ効果をもつと言えるだろう。

5

5は恋の葛藤である。忘れようとして容易には忘れえぬ愛を、詩人は〈ブシケ〉に、〈娼婦〉に、〈恋人〉に呼びかける。〈風景〉にも〈苦痛〉にも呼びかける。〈忘却〉は命令であり、同時に協同作業でもある。〈忘却〉を可能にしてくれるのは、〈忍耐〉だけである。

.....

O *ma soeur oublie-moi*; *oublions nos amours*
 O paysage ô *montagnes* vastes et terres
 Douleurs déchiquetée! périssent nos désirs
 Dans l'herbe verte du silence et sous la lune.

Patience à l'oeil seul, à l'oeil seul *Patience*
 Est le dernier servant de la *dame d'oubli*
 Car il l'use, *l'aimant* par-dessus toute *femme*
 D'un doigt tranquille et dur et d'un coeur averti

.....

(1節は訳を省略)

忍耐はただひとつの目、ただひとつの目しかない忍耐
 は忘却の婦人に仕える最後のしもべ
 彼は婦人を使い果すから すべての女たちにまして彼女を愛しながらも
 静かなきびしい指で すべてを知った心で

.....

同じことが繰り返されてはいるが、修飾部分と被修飾部分を逆にすることによって、Jouveの対立・関連のシステムの一環となっている第5行に特に注目したい。

この詩では、さらに子音[m]の効果を見逃すわけにはいかない：*mer*(海, 1行目)—*m'y*(わたしはそこに, 2行目)—*commune*(共通の, 3行目)—*ma*(わたしの, 5行目)—*moi*(わたし, 5行目)—*amour*(愛, 5行目)—*montagne*(山, 6行目)—*dame*(婦人, 10行目)—*aimant*(愛しながら, 11行目)—*femme*(女, 11行目)—*crime*(罪, 14行目)—*mourant*(死にながら, 16行目)—*proclame*(宣言する, 16行目)。特に、〈わたくし〉(me, ma, moi), 〈愛〉(amour, aimant), 〈女〉(dame, femme), 〈罪〉(crime), 〈死〉(mourant) という Jouve 文学のキーワードにそれぞれ[m]が入っていることに気づく。[m]は Jouve にとって特別に親しい音素(phonème)と言えるのではないだろうか。例えば小説『ポリナ1880年』(*Paulina 1880*, 1925)においても、[m]は読者を Jouve

の宇宙にひきずりこむ重要な役割を果たしてはいないだろうか¹⁶⁾。なお, *oubli* (忘却) とその派生語の繰り返し (*oubli—oublie—oublions—oubli*) も, 詩の意味を強めていることをつけ加えておこう。

6

ここには *Jouve* 自身のこと, 特に 1924年直前の苦しみの時期のことが歌いこまれているように思われる。

Patience et privé s'éloigne le chemin,
Rêve! Et voici le sol oublié sur le seuil
Des murs, voici le vent
Sauvage du désert de sable et du besoin.

.....

Tempête de *mensonge!* et ce que veut la plume
 Dire dans la douleur des murailles fermées
 Est-ce voix du démon ou parole de *l'ange?*
 Tempête de *courage!* et l'*oubli* et le Rien
 Sont-ce des vers ou bien des créatures blanches?

忍耐づよい ひとりだけの道が遠のく
 夢よ! ここにあるのは 城壁の
 入口で忘れられた土地
 ここにあるのは 砂漠と欲求の荒々しい風

.....

虚偽の嵐よ! ペンが
 閉じられた壁の苦痛のうちに言おうとしたこと
 それは悪魔の声 それとも天使のことば?
 勇気の嵐よ! 忘却と「無」は
 いくつかの詩句, それとも白い被造物?

第一行の冒頭の破裂音 [p] の効果, *voici* のたたみかけるような繰り返し, 2行目から3行目に移る *le seuil/Des murs* (城壁の/入り口), 3行目から4行目に移る *le vent/Sauvage* (荒々しい/風) の修飾語と被修飾語を分ける *enjambement*, *sol* (土地, 2行目)—*seuil* (入口, 4行目)—*sauvage* (荒々しい, 4行目)—*sable* (砂, 4行目)—*scandale* (スキャンダル, 6行目) に見られる [s]

の繰り返しによる意味の強調, *mensonge* (虚偽, 9行目)—*ange* (天使, 11行目)—*courage* (勇氣, 12行目)における[3]の, 意味に与える効果。7行目と8行目の主語と述語の倒置, 〈悪魔〉と〈天使〉の間を揺れる疑問形。これらすべてが, 意味の面から, 音の面から, 文法の面から, われわれをこの詩の錯綜と対決の世界へとひきずりこむ。

7

7から12までは〈第2の点〉(DEUXIEME POINT)である。〈第2の点〉は3点のうちで最も長く, 詩人の迷いは一層深まる。血みどろの苦悩に満たされた〈暗夜〉である。神は見えず, 信じようとするみずからの意志さえも見失われがちな闇の場である。

第1の点をあらわす言葉が, 〈忘れること〉〈ゆだねること〉であるとするなら, 第2点のそれはさらに進み, 自分から〈うち砕く〉ことである。

.....

Briser est le deuxième effort *ensanglanté*

O briser par la mort sans que la mort brisée

Accable tel un calme de nature

Ce malheureux sorti des porches de la mort,

Sans que ce soit en haut des capitales

La colonne tronquée de marbre imaginée

Qui symbolise la cassure et le jamais.

.....

うち砕くことは血まみれな第二の努力

おお 死によってうち砕くこと うち砕かれた死が

死のポーチから出た不幸な人をうちひしぐことなく (以下, 訳は省略)

5行目だけが孤立していることで, *briser* の重みが一層伝わってくる。〈うち砕くこと〉は, 人間を破滅させてしまうことではない。死は二つの顔をもっており, 望ましい死は甦りを前提とした死でなければならない。「死」の逆説, 矛盾は, 3節1行目の対称的な詩句によって巧みに表現されている。死は〈うち砕くもの〉であり同時に〈うち砕かれるもの〉(*la Mort brisante-brisée*)なのだ。ついでに, この行および3行あとの *sans que* [sāk] (〜なしに)が, 5行目の *ensanglanté* [äsügläte] (血まみれな)に含まれていることにも意味が無いとは言えないように思われる。

8

8には突然、未来形が登場し、決意の激しさを増す。

Je tuerai ces bouches vermeilles
Sous les bois du premier péché
Vastes formes suantes belles
Etendues et éternité

.....

J'écraserai de coups leurs ailes
Je frapperai de coups mes membres
Je tuerai ce démon de l'ange
Qui parle la langue des morts.

わたしは殺すだろう 朱色の唇を
原初の罪の森のもとで
広大な形 汗ばんでいる美女たちを
そのひろがりと永遠を

.....

わたしは潰すだろう かれらの翼を
わたしは叩くだろう わたしの手足を
わたしは殺すだろう 死者たちの言葉を語る
天使の悪魔を

〈美女〉と〈天使〉と〈悪魔〉の混淆が、ここにも見られる。それはまた「死」のなかで詩人自身とも混り合う。四行目の *Etendues* (ひろがり) と *éternité* (永遠) は、その中間の接続詞 *et* の視覚的助けも借りて、前行の意味を強めている。

9

8の延長として同じく未来形で歌われる。

Comme la guerre atroce enflamme en profondeur
L'immense matériel des villes et des chairs
En ce temps sur le sein douloureux de la mère
Je combattrai travail aveugle avec la mort

Car une seule guerre est guerre.

.....

すさまじい戦いが
 街々と肉体の無限な物質を深い場所で燃やすように
 今 母の苦しい乳房の上で
 わたしは死と共に闘うだろう 盲目のたたかいを
 ただひとつの闘いは闘うことだから

戦争も、〈母の乳房の上〉での闘いも、詩人にとって根はひとつであり、共に〈死と共に闘う
 盲目のたたかい〉なのだ。それはまた、〈虚栄〉(vanité) や〈傲慢〉(orgueil) との闘いでもあ
 る(原文7, 10行目)。

10

この詩も同じ魂のドラマをひき継いでいる。意味の上からもリズムの上からもそれが表われて
 いる。詩人の期待するような le masque de la pierre (石の仮面) でない生身の女が、男(詩
 人)に語りかける形でそれは歌われる。

.....

Je suis pesante mais céleste et mes regards
 Sont étincellement profond et sans lumière
 Comme est ce qui n'est pas matière; le hasard
 Qui est fatalité mélancolie première

M'a faite avec la femme et l'homme au fond de toi
 Femme jamais défunte, ange plein de jeunesse;
 Mais ce beau et cette Belle dans leur tendresse
 O Poète, tu briseras aussi leur loi.

Oui la femme est au centre et tyrannique tu
 L'aimes. Mais son amour est un tyran et tu
 L'abandonneras morte et pour un petit nombre
 De splendeurs délivrées, délicates et sombres.

.....

わたしのからだは重いが天上的だ わたしのまさざしは
 深い 光のない火花

物質でない存在のように。宿命
である偶然が 初めての憂愁が

わたしをつくった おまえの奥にいる女と男と一緒に
決して死なない女 若さに満ちた天使であるわたしを
だがこの美しい男 この美しい「女」を かれらの優しさのなかで
おお 詩人よ、あなたはかれらのおきてをもうち砕くだろう。

そう 女は中心にいて 僭主のようだ おまえは
彼女を愛する。しかし彼女の愛はひとりの僭主 そしておまえは
死んだ彼女を見棄てる わずかな
解き放たれた あえかな 暗い輝きのために。

女への愛も、男女の宿命的な〈おきて〉も、うち砕き、棄てねばならない。死と同様、女も二つの顔をもつ。女は愛すべきものであると同時に棄てねばならないものであり、愛の対象であると同時に、救いのための道具でもある。〈重いが〉(pesante) 〈天上的〉(céleste), 〈光のない火花〉(étincellement……sans lumière), 〈宿命である偶然〉(le hasard/Qui est fatalité), 女を〈愛し〉(tu/L'aimes), 〈見棄てる〉(tu/L'abandonneras) こと, 〈暗い輝き〉(splendeurs……sombres) のように、意味上対立する語の結合。特に7行目から8行目にかけてと、8行目つまり2節の終から3節の始めにかけて (Qui est fatalité mélancolie première/M'a faite……), および主語だけ前行に残した13行目から15行目にかけての (tu/L'aimes……tu/L'abandonneras) 大胆な enjambement。これらすべてが、Jouve 的なエロスの弁証法と、それをまだ悟りきれぬ詩人の迷い、足踏み、闘いを感じさせることに役立っている。〈若さに満ちた天使〉には Baudelaire の思い出が織りこまれる。また、この節では Ce beau et cette Belle のように、女だけ大文字になっていることも見落せない。女は、男を包みこみ、男を救いへと導く「母」でもある。同時にこの女は、個々の女を超えた本質的な意味での「女」ともとれよう。

この詩でも、子音 [m] の効果が感じられる。一節、二節の *formée* (つくられる, 1行目)—*fermée* (閉じられる, 2行目)—*malheureux* (不幸な, 2行目)—*mortels* (死すべき, 3行目)—*masque* (仮面, 4行目)—*étincellement* (火花)—*lumière* (光)—*matière* (物質)—*mélancolie première* (初めての憂愁) にも意味を感じられるが、特に、4節の [m] は、Jouve の本質的なテーマ (愛・死) を浮かび上らせる。 *femme* (女, 9, 13行目)—*homme* (男, 9行目)—*aimes* (愛する, 14行目)—*amour* (愛, 14行目)—*morte* (死せる, 15行目)。ここには出てこないが、[m] は同じく Jouve のテーマのひとつである *mère* (母) を連想させる。

11

11全体が、〈うち砕こう〉という激しい意志のほとばしりである。

La colère mortelle et le bruit la fureur
Doivent sortir! écume aux lèvres de la vie
Je tue et je tuerai! je fracasse l'horreur
Avec ces larmes et la force de ce bruit.

O douleur plus nombreuse que le poids des armes
Des secondes du temps sur plus de cinquante ans!
Brise encor (sans blesser de très fragiles formes
Du coeur) ces amoncellements vrais et bouillants.

死すべき怒り ざわめき 憤りは
外に出るのだ! 命の唇に泡を浮かべ
わたしは殺す 殺すだろう! わたしは恐れをうち破る
これらの涙 このざわめきの力で。

おお 武器の重さよりも重い苦痛よ
五十路を越えた年月のうちのわずか数秒の苦痛よ
なおも砕いてくれ (こわれやすい心の形を傷つけずに)
これらの真実の わきたぎる堆積を。

1行目から2行目への enjambement: ……le bruit la fureur/Doivent sortir! (ざわめき, 怒りは外に出なければならない!), 3行目の Je tue et je tuerai! (わたしは殺す, 殺すだろう!) に至る crescendo, 音の面では larmes [larm] (涙) と armes [arm] (武器) の共通性に注目したい。これは, Jouve の他の詩, 例えば同じ『パリの聖母』中の『第十三番目』(Treizième) にも使われている手法である。

12

12は〈第2の点〉のしめくくりで、『インノミナータ』中、最も成功している詩のひとつのように思われる。諧調が保たれ、言葉の意味は哀しい優しさを帯びる。聖とエロスが〈心の聖堂〉の夜の中で結合へと向う。

.....

Sa solitaire solitude à l'origine

La douleur dont il est le hautain messenger
 La prison qui le voit détenu et geôlier
 L'instinct de mort régnat sur les endroits du crime.

Mélancolie! je briserai ta robe longue
 Ton corset langoureux sous les rampes du gaz
 Et ton sourire fardé noir de travailleuse
 Triste hétaire de l'enfant, pensée profonde.

愛がうち砕くもっとも偉大な醜さは
 心の聖堂の破風にひろがった
 この苦い夜と この深い沈黙だ
 冷酷な領主の城では、すべてが凍っている。

原初における彼のひとりきりの孤独
 彼がその尊大な使者となる苦痛
 とらえられ、またその牢番ともなる彼を見る獄舎
 罪の場所を支配する死の本能。

憂愁よ! わたしはおまえの長いドレスを砕くだろう
 ガス灯の下のおまえのものうい胴衣を
 そしておまえの苦役の黒く化粧したほほえみを
 幼な子の 悲しい娼婦よ、深い思念よ。

détenu (囚人) と geôlier (牢番) という、Bandelaire 的対立語の並列。対立してはいないが、
 〈娼婦〉と〈深い思念〉という Jouve 的な結合や、sourire (ほほえみ) と hétéraire (娼婦) の韻
 と意味両方による paradigm 的つながり。silence (沈黙, 2行目)—sa solitude solitaire (彼の
 ひとりきりの孤独)—sourire (ほほえみ) の [s] の効果に注目したい。

13

13から終までは、〈第3の点〉(TROISIEME POINT)である。ここに到達すると、詩人の迷
 い、葛藤は姿を消し、あるがままに受容する姿勢に変わる。「聖」がひろがり、「エロス」は影を
 ひそめる。

Tu me vois nu. *J'accepte* de mourir
J'accepte de briser le jet de ma poitrine

Et *j'accepte* d'aimer, *j'accepte* de pâtir
 J'accepte d'échouer dans des hommes indignes

J'accepte de trembler : la clé de ces mystères
 Sans que j'en sache rien *s'endort* entre tes mains
 Ma vie corrompue ignore prisonnière
 Ce souffle qui fut mien lorsque tu l'as voulu

Une ombre tient la clé sur la porte sinistre
 C'est la prière elle soulève son sein beau
 De créature sous le sombre apocalypse.

あなたは赤裸なわたしをごらんになる。わたしは死ぬことを受けいれます
 わたしは胸の噴射をうち砕くことを受けいれます
 愛することを 苦しむことを受けいれます
 価いしない人々のなかで挫折することを受けいれます

震えることを受けいれます。これらの神秘の鍵は
 わたしがそれについて知らぬうちに あなたのお手の中で眠っています
 腐ったわたしの命は とらわれていて知りません
 あなたが望んだ時 わたしのものだったあの息吹を

ひとつの影が 不吉な扉で鍵をにぎる
 あれは祈りだ 彼女は高まらせる
 被造の美しい胸を 暗い黙示の下で。

これ全体が祈りである。まず, *J'accepte* [zaksept] という, それ自体が強い感じを与える無
 声音の結びつきを二つ ([ks], [pt]) もつ語の繰り返しが読者をひきつける。すべてを捨てて,
 受容しようとする詩人の決然とした姿勢が音によっても表明される。一たん受け入れてしまうと,
 音の面からも安らぎが訪れる。まず6行目の鼻母音による安らぎ : [sā kə zā saf rjē sādɔ : r
 ātrə te mē]。次に, 破裂音 [k, p, t] から, 摩擦音 [s] への移方 : *sans* (なしに)—*sache* (知る)
 —*s'endort* (ね入る)—*souffle* (息吹)—*soulève* (高める)—*son* (彼女の)—*sein* (胸)—*sous* (下に)—
sombre (暗い)—*apocalypse* (黙示)。〈胸の噴射〉, 〈美しい胸〉のようなエロティックな images
 が, 〈祈り〉, 〈暗い黙示〉のような聖を喚起する images に吸いこまれて行く。特に最後の節で
 は, 〈祈り〉そのものが女性の姿とひとしくなる。ボードレールの宇宙と十字架の聖ヨハネのひ
 そかな合体のかたどりのように。〈不吉な〉という形容詞も, 暗夜の中で神に囚われ, も早祈る

ことしかできぬ魂のおののきをよく伝えている。

14

祈りつつすべてを受け入れることによって、詩人は子羊と鳩を見、最後には子羊だけが残る。

Priant, *peut-être* ai-je *vu* dans les airs
Intérieurs, l'agneau et la colombe
Peut-être ai-je éprouvé leur blancheur qui n'est blanche
Que par grâce immense et sans chair

Peut-être ai-je connu la *pure* vision
A la *nuit* lorsque toute l'infâme *ournée*
Est déposée dans l'ombre,
Et l'agneau promis à la mort et *souriant*

Emanait jusqu'à moi sur le fond du *néant*
La colombe trop chaude était déjà *passée*.

冒頭の *Priant* (祈りながら) と、たたみかけるような *peut-être* (多分) の繰り返し。それを受けとめる *pure vision* (清らかなヴィジョン) が、破裂音 [p] の強さに助けられ、詩人の強い確信をわれわれに伝える。音の面では、*connu* (知った)—*pure* (清らかな)—*nuit* (夜) にみられる [y] ([ɥ]) の効果、6行目と10行目の最後の *ournée* (日) と *passée* (過ぎた)、8行目と9行目の最後の *souriant* (ほほえみながら) と *néant* (虚無) のそれぞれの、*rime* の一致が見落せないだろう。この詩にも、*leur blancheur qui n'est blanche/que ……* (……しか/白くない彼らの白さ) のような、あまりにもはっきりした対立する *images* がある。

15

テーマはひき続き子羊である。冒頭から子羊の逆説が提示される。

Agneau! création du céleste silence
Dans l'immense péché de la création
Je t'aime. Tes doux yeux, sacrifice et science,
Sont plus forts que la mort et que l'explosion

De la force; et ta patience est un *puits*
D'ardeur au fond du puits vivant des catacombes
Mais indicible est la joie folle de ce monde

Sur ta belle agonie *noire* comme les *nuits*.

子羊よ！ 天の沈黙の創造よ
 創造の無限の罪のなかで
 わたしはおまえを愛する。おまえの優しい目 犠牲と科学は
 死よりも、爆発する力よりも

強い。おまえの忍耐はカタンコブの生きた井戸の底の 灼熱する井戸
 だがこの世の狂気した歓喜は言い尽くせない
 夜のようなおまえの美しい暗黒の苦悶の上で

Création du céleste silence (天の沈黙の創造) と l'immense péché de la création (創造の無限の罪) における création をめぐる位置と意味の両方での対立。その直後の Je t'aime の力強い肯定。一節から2節にかけての enjambement の意味との一致 (l'explosion/De la force 力の/爆発), 3行と4行の sacrifice et science,/sont…… の [s] の反覆の効果。puits (井戸) と nuits (夜) における [çi] と, *noire comme les nuits* の [n] の共通性, ta belle agonie *noire* の Jouve 的な語の結合に注意を喚起しておきたい。

16

連詩『Innominata』は、子羊であるキリストの人性の讃歌で終る。

Humanité du Christ, à l'époque parjure
 Dans les églises où Jésus est pollué
 Dans les états où Jésus est injure
 Dans les combats où Jésus mort est fornicqué,

Humanité du Christ ô membres du mystère!
 Une divine odeur recevant ses entrailles
 En moi; et la matière des tenailles
 Ne faiblissant que sous les coupes de colère!

Humanité du Christ! en faiblesse et en ombre
 Tu veux que j'aie connu l'ivresse singulière
 De mon sang qui a vie et ressource première
 Dans ta perfection hors du temps le plus sombre.

キリストの人性よ、偽りの誓いに満ちた時代の

キリストが汚染される教会のなかの
 キリストが侮辱される国家のなかの
 死せるキリストが姦淫される闘いのなかの

キリストの人性よ おお 神祕の手足よ！
 わたしのなかで彼のはらわたを受けとめる神の香りよ、拷問の材料は
 怒りの裁断の下でしか弱まらない！

キリストの人性よ！ 弱さにおいて影において
 あなたは望む わたしがじぶんだけの特異な血の陶酔を知ったことを
 あなたの完成のなかに
 生命と初めての手だてをもつ血のもっとも暗い時間を超えて。

Humaité du Christ (キリストの人生) および Dans les (の中に) の繰り返しが、連禱を想起させる。この詩だけがきちんと脚韻を踏み、しかもこれらの脚韻はそれぞれ一つの意味をになっているようにも思えるのである。

parjure	} 交互韻	mystère	} 抱擁韻	ombre	} 抱擁韻
pollué		entrailles		singulière	
injure		tenailles		première	
forniqué		colère		sombre	

第一の節では、意味の一致がある。人間はまだ汚辱の中に置かれている。第二節になると、神の要素が人間的な要素をとり囲む。第三節では、人間はキリストの暗闇のなかに憩う。

ここでもまた [m] の効果を指摘したい：*Humaité* (人生)—*mort* (死)—*membre* (手足)—*mystère* (神祕)—*moi* (わたし)—*matière* (材料)—*mon* (わたしの)—*première* (初めての)。[m] を含むこれらの語は、enjambement によって隔離させられた7行目の *moi* に一たん集中し、改めて次の語へと発展して行く。ついでに、*faiblesse* (弱さ)—*ivresse* (陶酔)—*ressource* (手だて) の [s] にも注目しておこう。

長い〈暗夜〉を経て、詩人はついに、〈キリストの人性〉を黙想し、これと一致することによって、〈全的な剝奪〉を受け入れることができたのであった。詩全体が、écriture 全体が誇りと信仰のかたちとなっている。三番目の〈キリストの人性〉に打たれた感嘆符にも注意したい。

以上で見てきたように、Pierre Jean Jouve の『Innominata』は、「エロス」と「聖」の dialectique の、〈一致へと向う愛の結合〉(conjonction amoureuse pour l'unité) の、稀れな〈形・意味〉のひとつとなっているのである。

注

- (1) この分析は、その大部分を、Henri Meschonnic, *Pour la poétique* I, III, Gallimard, および1970年に筆者が聴講していた Paris 第8大学での Meschonnic 氏の講義に負っている。言語学の知識を縦横に発揮した Meschonnic 氏の緻密な研究からは、もとよりはるかに遠いものではあるが。(例えばここではリズムの研究は全然なされていない)。母国語がフランス語と全く異なっている研究者にとって、このような分析がどのように大胆なことかを知っての上での試みであった。先輩諸兄弟の助言を仰ぎたい。
- (2) cf. *Le Thème Nada* dans *En Miroir*, Mercure de France, 1954, pp. 124-130。以上で断片的に挿入した Jouve 自身の言葉も皆ここからとったものである。
- (3) Cf. *Pour la poétique* I, p. 67.
- (4) 詩の引用はすべて *Innominata de Vers Majeurs* dans *La Vierge de Paris*, Mercure de France, 1957, pp. 193-210. による。
- (5) Cf. Avant-propos de *Sueur de Sang*, Mercure de France, 1955, pp. 11-17。とりわけ次のような箇所注目したい:《Déjà se dégage cette idée que pour certains esprits (les mystiques) doit exister la possibilité de rapports et d'accords fondamentaux entre le sur-moi, puissance contraignante archaïque, et le Fond érotique plus universel qui est leur non-moi》(p. 14);《Nous devons donc, poètes, produire cette <sueur de sang> qu'est l'élévation à des substances si profondes, ou si élevées, qui dérivent de la pauvre, de la belle puissance érotique humaine》(p. 17)。
- (6) Cf. Saint Jean de la Croix, *La Montée du Carmel*, Edition du Seuil, 1947.
- (7) 次のような詩を引用しておこう。
- O nuit obscure où je suis né
Nuit du sexe nuit de l'été
Nuit de la bête et des crochets
Nuit de l'impur
- Nuit de ma nuit toute éprouvée
Nuit de mon rien nuit toute pure
Nuit volonté
Nuit de saint esprit Charité
- Puis-je vous dénuder sublimes
Toutes? La nuit s'est avancée
Le voyageur commence à suivre
L'ensanglantement à ses pieds.
- (*Nuit des Saints* in *La Vierge de Paris*, Mercure de France, 1957, p. 108)
- (8) 例えば次のような箇所がある。
- 《Il m'a, il m'a
Il m'a, plongée dans l'Amour
profondément, il m'a immergée dans l'Amour
amoureuusement.》
- (*Paulina 1880*, Mercure de France, 1959, p. 198)
- (9) この小論は日仏両語で平行して書かれた。仏語の方は *Pierre Jean Jouve 2*, la revue des lettres modernes に本年中に発表される予定。